

## 「大いなるバビロンの正体を見極める」

「大バビロン」の正体を見極めるには改めて、その関連記述全体を検証してみる必要があります。一見すると、大娼婦なる大バビロンという一つのことについて書かれているようですが、注意深く読むと、「大娼婦」と「大バビロン」という二つの関連したものについての描写であることが分かります。まず、端的に分かるのは両者の座っている場所の違いです。これを最初に比較してみましょう。

（啓示 17:1 - 2）「また、七つの鉢を持つ七人のみ使いの一人が来て、わたしと話してこう言った。「さあ、多くの水の上に座る大娼婦に対する裁きをあなたに見せよう。地の王たちは彼女と淫行を犯し、地に住む者たちは彼女の淫行のぶどう酒に酔わされた」

これが、「大娼婦」に関する記述。この女は「水」の上に座っており、野獣に乗っていません。そしてそれは全地の人々です。

（啓示 17:15）「あなたの見た水、娼婦が座っているところは、もろもろの民と群衆と国民と国語を表わしている」

「大バビロン」についてはこう表現されています。

「緋色の野獣の上に、ひとりの女が座っている」「七つの頭は七つの山を表わしており、その上にこの女が座っている」

ここでは、水の上に座っておらず緋色の野獣もしくは頭／山の上に座っています。

このようにして両者の描写を比較したのが次の図表です。

	大娼婦	大バビロン
座っている所	多くの水 (諸々の民と群衆と国民と国語)	緋色の野獣の上 7つの頭 (山／丘)
影響を及ぼした 対象と主な罪状	地に住む者たち  地の王たちは彼女と淫行を犯し、 淫行のぶどう酒に酔わされた  淫行によって地を腐敗	あらゆる国民が[いけにえ]にされ  地の王たちは彼女と淫行  聖なる者たちの血とイエスの 証人たちの血に酔っている  預言者と聖なる者たちの血、 地上でほふられたすべての者の血
他の別名		女 女王 大いなる都市 娼婦たちと 地の嫌悪すべきものとの母
裁き	淫行によって地を腐敗させた 大娼婦に裁きを執行	ご自分の奴隷たちの血の復し
裁きの方法	10本の角と野獣による 憎み、荒れ廃れさせて裸にし、 その肉を食いつくし、 火で焼き尽くす	速い勢いで投げ落とされ 災厄は死と嘆きと飢きん 火で焼き尽くされる

このように、両者が異なった存在であることは明らかです。

双方に共通しているのは、「地の王立ちと淫行を犯す」ということと最後に「火で焼き尽くされる」という2つだけです。

そして「裁き」の方法とその主な理由を見ても違いがあります。「大娼婦は」その欺瞞的な行いの故に「地の王たち」自身の「憎しみ」を買い、それ故に、「裸にされ、肉を食い尽く」されることとなります。

一方「大バビロン」は「真の神の民」に対する血の復讐のために、「死と嘆きと飢饉」が（おそらく）神自らもたらされ、最後に双方共に「火で焼き尽くされる」ということでしょう。

また「大バビロン」も「ひとりの女」として単数で表現されますが、何故かその額にある名は「大いなるバビロン、娼婦たち（複数）と地の嫌悪すべきものとの母」とあって、獣に乗っている女は、娼婦たちの母、総元締めのような書き方がされているのです。

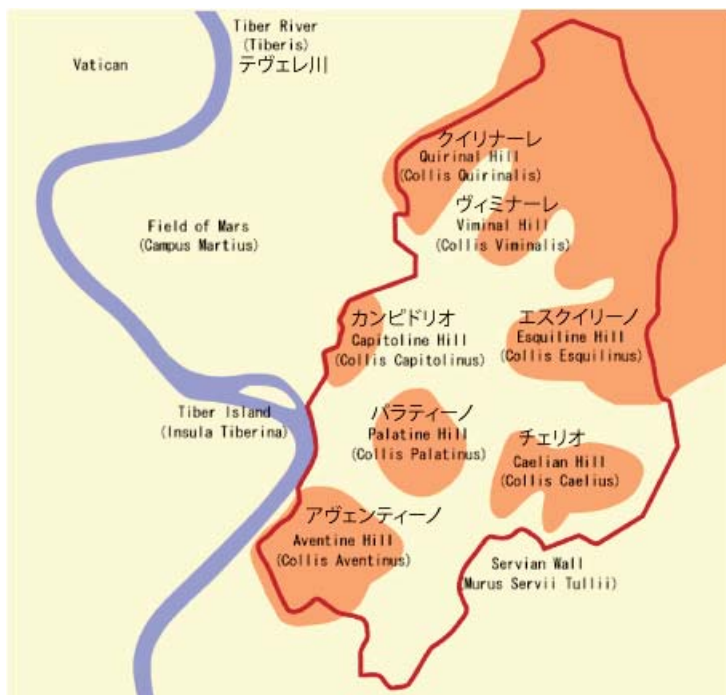
意外な事に（？）大バビロンは「娼婦」とも「大娼婦」とも呼ばれていません。「娼婦たちの母」というのがその別名です。

ではその「大バビロン」の実体は何でしょうか。改めて場所から考えます。

「緋色の野獣の上に、ひとりの女が座っている」「緋色の野獣」は黙示録13章の「海から上がってきた」野獣（ダニエル7章の最後の獣であるローマ）に「八人目の王」である「小さい角」が出た、最終野獣の姿です。

「七つの頭は七つの山を表わしており、その上にこの女が座っている」

この後に「そして7人の王がいる・・・」と続いています。その続く節は明らかに地上に出現する世界強国を表していることが分かりますが、聖句は「七つの頭は七人の王を表している」とは述べず、頭は山（もしくは丘）であり、そこに「女」が座っているとして、文は区切られています。従って、女が座っている七つの山を一連の世界強国とは別のものとして捉える必要があるかもしれません。



ローマの市街中心部からテヴェレ川東に位置する古代ローマ時代の七つの丘

また「大バビロン」は「大いなる都市」であるとも表現されます。そしてローマには七つの山（丘）があるとされています。

これら三つの要素を全て満たすもの、そのキーワードはやはり「ローマ」でしょう。

しかしローマという国家、ローマという国土ではあり得ません。従ってその正体は、「ローマ・カトリック」そして、端的に言えば

「バチカン」そのものしかありません。

「小さな角」であり、「不法の人」であり「荒廃をもたらす者」でもある緋色の野獣は唯一の「世界宗教」を併せ持つ「世界統一国家」を作るとされています。

それ故にローマ教皇と契約を結び、「大バビロン」を乗せた姿で登場し、そして用済みになったら、突然裏切って「焼き尽くす」というシナリオが「黙示録」に描かれています

## ローマ・カトリックと「バビロン」との関わり

では、実質的な意味でも「バチカン」が「大バビロン」と言えるのでしょうか。

次にローマ・カトリックと「バビロン」との関わりを明らかにしましょう。

カトリックと正教会に見られる崇拜方式のもっとも特徴的な部分に地母神崇拜が見られます。母神崇拜は、宗教のごく初期の形態だったようです。考古学者たちは、ヨーロッパ全土や、地中海諸国からインドに至る各地の古代遺跡で、裸の母神の小像や偶像を発掘してきました。日本にも「鬼子母神」という同様の地母神崇拜があります。古代の地母神の一つである

バビロニアの神々の中でも「イシュタル」は主要な女神で、これはシュメール人の多産の女神イナンナに相当します。イシュタルは戦争の女神であると同時に愛と官能の女神でもありました。また、イシュタルは娼婦の守護者であり、その神殿では神聖娼婦が勤めを果たしていました。女神イシュタルの正式な配偶神というのは存在しませんが、多くの愛人（神）がいたことが知られています。これは王者たる男性が恋人としての女神から大いなる神の力を分け与えてもらうという当時の思想に縁っているということです。

フランスの学者エドゥアール・ドルムは、自著「バビロニアとアッシリアの宗教」の中でイシュタルについてこう書いています。「彼女は女神であり、淑女であり、祈りに耳を傾け、怒った神々の前で執り成しをする憐れみ深い母であった。……彼女はすべてのものの上に高められた。女神の中の女神、あらゆる神々の女王、天地の神々の君主となった」。

イシュタルの崇拜者は、「処女」、「聖なる処女」、「処女なる母」などの言葉でイシュタルに呼びかけました。メソポタミアのイシュタルに並び、カナンのアシュタロト、シリア（フェニキア）のアスタルト などこれらは祭祀の上と言語学の上から、同一の神格がそれぞれの地方で信仰されたものであり、また神々の母と呼ばれました。

イシュタル



エジプトで崇拜されていた主な母神はイシスです。歴史家のH・G・ウェルズはこう書きました。「イシスは多くの信奉者を魅了した。信奉者たちはイシスに命をささげた。神殿には、天の女王として王冠をかぶり、幼いホルスを腕に抱くイシスの像が立っていた。イシスの前ではロウソクの炎がゆらゆら揺らめいた。ろうでできた奉納物が神殿のあちこちに掛かっていた」。(「世界史概観」) イシス崇拜はエジプトで極めて盛んに行なわれていました。

このイシス信仰は、共和政末期にローマへ持ち込まれて発展し、200年頃にはほぼローマ帝国全域で崇拜されました。イシスは永遠の処女であり、処女のまま神を身ごもったとされ、「天上の聖母」などの名を持ちました。

そしてイシスがホルスに授乳する様子などが、幼子を抱く聖母マリアの図柄や聖母崇拜の信仰の元になったといわれています。



また使徒19章にも出て来る「アルテミス」も地母神で、その崇拝者はアルテミスに向かって、「偉大な女性」、「淑女」、「女王」、「処女」、「祈りを聞き届けてくださる方」といった言葉で呼びかけました。

使徒パウロが背教を予告したのは、エフェソスにあったクリスチャン会衆の長老たちに対してでした。

「彼はミレトスから人をエフェソスに送って会衆の年長者たちを呼んだ。あなた方自身と群れのすべてに注意を払いなさい。わたしが去った後に、…あなた方自身の中からも、弟子たちを引き離して自分につかせようとして曲がった事柄を言う者たちが起こるでしょう」（使徒20:17, 28 - 30）

エフェソスに潜在していた危険の一つは、母神崇拝へ逆戻りすることでした。それは実際に生じたのでしょうか。

新カトリック百科事典にはこうあります。「エフェソスは巡礼の中心地として、使徒ヨハネの埋葬の地とみなされていた。……エフェソス公会議（431年）が証した別の伝承では、聖母マリアと聖ヨハネが結びつけられている。公会議の開かれた聖堂はマリア教会と呼ばれた」。

ヨハネの福音書にはその19章で、イエスは、死の直前にご自分の母親の世話をヨハネに』託しています。「それで、その時から、その弟子は彼女を自分の家に引き取った」と記されています。

カトリックの別の文献（「テオニューベル・アンシクロペディ・カトリック」）は、マリアがヨハネと共にエフェソスに行き、そこで晩年を過ごしたという「もっともらしい伝承」について述べています。

新ブリタニカ百科事典はこう答えています。「神の母に対する崇敬にはずみがついたのは、キリスト教会がコンスタンティヌスのもとで帝国教会となり、多数の異教徒が教会に流れ込んできたときである。……彼らの信心と宗教意識は、『偉大な母』なる女神や『神なる処女』の崇拝によって何千年もの間に形成されたもので、はるか昔のバビロニアやアッシリアの古い民間宗教から発達してきた」。母神崇拝を“キリスト教化”するのに、エフェソス以上に適した場所はなかったでしょう。

こうして、このエフェソスにおいて、西暦431年にいわゆる第3回公会議は、マリアを「テオトコス」—「神を産んだ者」あるいは「神の母」という意味のギリシャ語—と宣しました。

新カトリック百科事典はこう述べています。「教会がこの称号を用いたことが、その後数世紀にわたり、マリアの教理やマリア信仰の発展に決定的な影響を与えたことは疑えない」。

この公会議が開かれた「処女マリア教会」の廃きよは、現在でも古代エフェソスの遺跡で見ることができます。マリアが暮らして死んだ家と言い伝えられる礼拝堂も訪れることができます。1967年に法王パウロ6世は、エフェソスにあるこれらマリアゆかりの聖堂を訪れました。



確かにエフェソスは、パウロが1世紀に出くわしたような異教の母神崇拝が、「神の母」としてのマリアに対する熱烈な信仰に変化してゆく上で中心的な役割を果たしました。キリスト教国では、母神崇拝は主にマリア信仰という形で生き延びてきました。



「神の母」とされる聖母マリア

「宗教・倫理の百科事典」は、聖書学者 W・M・ラムジの次のような見解を引用しています。「5世紀のエフェソスで処女マリアに示された敬意は、異教徒の古代アナトリア人が行なった処女母神崇拝の[新たな]形態だった」。新約聖書神学新国際辞典はこう述べています。「『神の母』とか『天の女王』といったカトリック的概念は、新約[聖書]後の概念であるとはいえ、それよりもずっと以前の東方に宗教的、歴史的ルーツを持っている。……後年のマリア信仰には、異教の母神崇拝のこん跡が数多く認められる」。

これらのこん跡は偶然の一致と言うにはあまりにも数が多く、あまりにも細部にわたって

ます。処女マリアの母子像と、例えばイシスのような異教の女神像との類似点には注目せざるを得ません。世界中のカトリック教会にある幾百もの黒い聖母の像や聖画像を見れば、アルテミス像を思い出さないわけにはゆきません。前述の文献「テオーヌーベル・アンシクロペディ

・カトリック」は、そうした黒い処女についてこう述べています。「それらは、ディアナ[アルテミス]……やキュベレに対する民間信仰の名残をマリアに向けさせるための手段だったようである」。処女マリア被昇天の祝日の行列も、キュベレやアルテミスをたたえる行列が原型になっています。

マリアに与えられた称号そのものも、異教の母神を思い起こさせます。イシュタルは、「聖なる処女」、「わが淑女」、「祈りに耳を傾ける憐れみ深い母」といった言葉で呼びかけられました。イシスとアスタルテは「天の女王」と呼ばれました。キュベレは「すべての祝福された者の母」という称号を与えられました。多少の違いはあっても、こうした称号はみなマリアに与えられています。

第二バチカン公会議は「聖処女マリア」の崇拝を奨励しました。法王ヨハネ・パウロ2世がマリアを熱烈に崇敬していることはよく知られています。法王は広範な旅行の途中で、マリアの聖堂を訪れる機会を決して逃しません。ポーランドのチェンストホーバの黒い聖母の聖堂もその一つです。法王は全世界をマリアにゆだねました。ですから、新ブリタニカ百科事典が「母神」という見出しのもとに、次のように書いているのも不思議ではありません。「さらにこの語は、いわゆる石器時代のビーナスから処女マリアまで、幅広く様々な人物や像に適用されてきた」。塔 91 7/16-7 ページ





獅子に乗る古代  
バビロンのイシュタル

獣に乗った女をモチーフとする「大バビロン」は、獅子に乗る女神であった古代バビロンのイシュタルのイメージであり、また地母神アルテミスの「天の女王」は、イエスの母マリアの名を借りて復活し、ローマでの公会議において正式にキリスト教に入り込むことに成功したのです。

実際のところ、「キリスト教」はいつから存在するかというと、一世紀当時、聖書が書かれた時代には「キリスト教」と呼ばれるものは存在しませんでした。名称があったとすればキリストの弟子たちが「クリスチャン」と呼ばれたと言うことだけでした。

従って使徒たちの死後、背教が徐々に浸透し、ローマ帝国が国教と定めた時から「ローマ教」が名を変えて「キリスト教」として発足したと言っているでしょう。

誤解を避けるために、「ローマ・キリスト教」と呼んでおきましょう。

さて、額にはひとつの名が書いてあった。「大いなるバビロン、娼婦たちと地の嫌悪すべきものとの母」という名が額に書かれている「女」を初めて見たときにヨハネの反応に注目したいと思います。こう書かれています。

「彼女を目にした時、わたしは非常に不思議に思った。」(17:6)

「この女を見て、わたしは大いに驚いた。」(新共同訳)

「この女を見た時、わたしは非常に驚きあやしんだ。」(口語訳)

不思議に思う、驚くというのは、「意外」だったからでしょう。それまでにも赤い龍や野獣など数々の不可解に思えるもの、不思議な幻を見てきているので、もう慣れているはずですから、そう簡単なことでは、驚いたりはしないでしょう。

少なくとも字面から連想する限り、「七つの頭のある緋色の野獣」の方がよっぽど不思議で、「女」の方は確かに幾らか異様な感じはしますが、「非常に驚き怪しむ」ほどのことはないように思えます。やはりヨハネは、その「女」には相当不可解な印象を受けたのでしょうか。何がそれほど意外だったのでしょうか。それは、自分の知っている人に似ていたということに他ならないでしょう。

いったい誰に似ていたのでしょうか。それは、その息子から、生活の世話を頼まれた人であり、自分の母親のように接して一緒に暮らして来た人に酷似していたからでしょう。

そうですマリアです。

将来、どうしてそんなことになってしまっているのか、非常に驚くのも当然です。ところで「不思議に思った」という個人的な感想を、聖書の内容に全く関係なく何となく書いてみたと言うことでもないでしょう。

また、心の中でそう思っただけなのに、み使いはそれを読み取って「なぜ、驚いたのか」と反応しています。み使いがそのように反応した事には意味があるようで、その後、この野獣が、底知れぬ深みから復活する時、「人々は驚いて感心するであろう」と同じ意味の語句を用いて説明しています。つまり「どうして驚いたのか、これから示すことは、さらに[驚くべきこと]であることを印象付けようとして、そのように反応したのだらうと思います。



付加的な資料：

大いなるバビロンは「倒れた」と記されている「倒れた」の言語からの意味

日本語で「倒れた」と聞くと、倒壊、倒産のイメージが強いです。

しかし、原語的には必ずしもそこまでの意味を常に持つとは限らない。

下に挙げたのは、この語を辞書で検索した際の日本語訳です。

(ギリ語: ἔπεσεν [(英語) to fall])

○落ちる (=drop), (雨・雪などが) ふる, 低下する, 下がる, 下落する, 低落する, 下降する, 倒れる, 転倒する, 当たる, 倒壊する, 決壊する, 没落する, 降る, かかる, 転ぶ, 落石する, 転落する, 顛落する, 減水する, 低くなる, 落下する, 落城する, 滅びる, 滅ぶ, 滅亡する, 亡ぶ, 淪落する, 落ちる, 訪れる, 割る【反】rise

(幕などが) おりる

この中で、興味深いと思ったのは、「減水する」という意味があるのは面白いですね。

「顛落する」(てんらく) という語もありますが、これが、前後の文脈から考えると最も本来の意味合いに近いのではないかと思います。

「倒れた」と言われた後で、とぼっちりを受けたくないなら、彼女から出るよう、勧められていますので、この時点でまだ完全に滅ぼされているワケではなくその後、具体的な表現で滅ぼされる記述が出て来ます。

天からのみ使いの強い声でのこの叫びは、大いなるバビロンに注意を喚起する目的で、語られているもので、それまで、実に永い年月に渡って「大バビロン」は自分は女王として座す。嘆きを見ることはない」と豪語していたわけだから、突然に、青天の霹靂のごとく、いきなり落ちぶれた。ことを告げ知らせているのでしょう。

それで、「彼女は倒れた！ 大いなるバビロンは倒れた」の部分を分かりやすく翻訳してみると、「彼女は、完全に落ちぶれた！ 大いなるバビロンは幕を下ろした」

この辺が適当だろうと思いますが、どうでしょう。

前述のギリシャ語と同じ単語が使われている他の聖句の中には、例えば、くじがマッテヤに「当たる」と訳されたり、例え話の、種が「落ちる」などと訳されています。

さらには、マリアが足下に「ひれ伏す」など様々な言葉に訳されています。

当然、くじがマッテヤのところで「滅びた」わけでも、マリアが足下で「滅びた」わけではありません。